

3 者間共食コミュニケーションにおいて食事行動が会話に与える影響*

大武美香 (学籍番号 201021738)

研究指導教員: 井上智雄

1. はじめに

食事は日常生活において欠かすことのできない行動であるが、食事には生きていくために必要な栄養を摂取するという生理的機能だけでなく、共に食事をしている人との親交を深める社会的親睦の機能もある。パーティや結婚式、懇親会など、人が集まる行事、人と人とが交流する行事には食事が振る舞われることが多いし、日常生活においても食事をしながら会話をする場面は多い。

我々は、会話における食事の効果に着目している。本研究に先立ち、我々は食事の有無が3者間会話にどのような影響を与えるかについて検討した[1]。その結果、食事時の会話は、非食事時と比較して参加者間での発話量の偏りが減少していること(発話平準化現象)が確認された。この結果を受け、本研究は食事時に発話平準化現象が起こる仕組みを明らかにするために、食事時の参加者の発話行動と食事行動の兼ね合い方に注目し分析した。

2. 3者間会話データの取得と処理

分析には食事の有無による比較分析を行うために撮影したデータを用いた。データをビデオ分析ツールを用いて、発話、食事行動についてラベリングした。その後、各ラベルの数え上げ等を行い、食事行動が会話に与える影響を考察した。

2.1 データ取得手順

参加者は3名の大学生を1グループとして4グループの合計12名であった。各グループの参加者は相互に知り合いで上下関係はなかった。

参加者は、丸型テーブルを囲んで食事を行った。

ビデオは各参加者を正面から撮影する3台、全景を撮影する1台の合計4台を使用した。自然な会話となることを狙い、特に話題は指定せず、普段どおりにするように指示をした。料理はカレーライスとお茶、食事を使う食器をスプーンとした。

2.2 データ処理

発話は参加者ごとに、開始時間と終了時間をラベリングした。食事行動は腕の動きに注目し、手に何も持っていない状態、食器類を把持している状態、料理を保持している状態、スプーンを口に入れている状態、コップを持っている状態、飲み物を飲んでいる状態に分けてラベリングした。また、口内の食べ物の有無を明らかにするために、口内に食べ物がある状態、口内に飲み物がある状態の開始時間と終了時間をラベリングした。

食事条件、非食事条件それぞれ、各参加者につき400秒分、合計4800秒分をラベリングした。

3. 分析結果

3.1 口内の食べ物の時間の割合

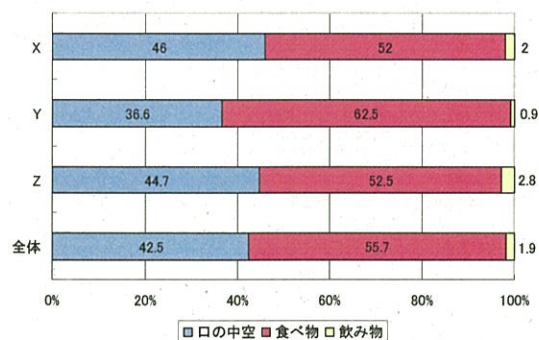


図1 口内の食べ物の時間の割合

発話平準化現象は、どの参加者も食べている間は話すことができないため、発話できる機会が自然と減ることではなかったのか。この仮説を検証するために、口内に食べ物がある時は発話しにく

* "Effect of dining behavior to conversation in triadic table talk" by Mika OTAKE

いのか、発話しにくいのであれば、口内が空である時とどのくらい違うのか調べた。

まず、分析時間全体の中でどのくらいの時間が口内に食べ物が時間であるのかを明らかにするために、参加者ごとに分析時間に対する口内の食べ物の有無の時間の割合を求めた。図1は、非食事場面で最もよく話した者をX、次によく話した者をY、そして最も話さなかった者をZとしたときの、食事場面の分析時間内の口内の食べ物の有無の時間の割合を示している。図1から、どの参加者も分析時間の約6割が飲食物を口に含んでいる時間であるという結果が得られた。

3.2 発話開始時の口内の食べ物の有無

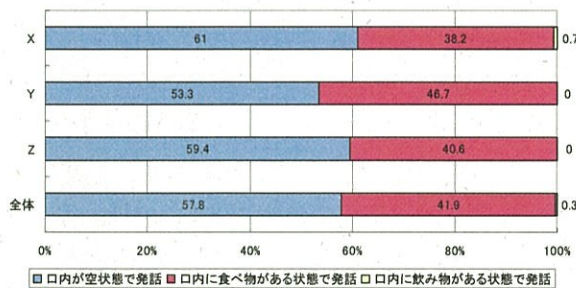


図2 発話開始時の口内の食べ物の有無

図2は非食事場面で最もよく話した者をX、次によく話した者をY、そして最も話さなかった者をZとしたときの、食事場面の発話開始時の口内の食べ物の有無の回数の割合を示す。図2から、どの参加者も発話の約6割が、口内が空である時に起きていることが分かる。

3.3 口内が空になった後の行動の割合

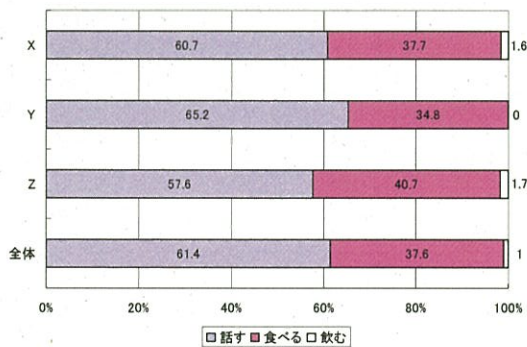


図3 口内が空になった後の行動の割合

普段発話が多い人も、友人と食事をしている状況で発話ばかりを選択していると、その人だけ食事が進まなくなるのではないかと。発話だけでなく、食事行動も選択することで発話が平準化されたのではないかと仮説を検証するために、口内が空になった後の行動を調べた。図3は口内が空になった後に話す・食べる・飲むのうち、どの行動を選択しているかの回数の割合を示している。図3からどの参加者も発話行動を選択した回数は約6割、食事行動を選択した回数が約4割であることが分かる。

4. 検討

3.1節、3.2節の結果から、全発話数の約6割の発話が、全時間の4割である口内が空である時間から話し始めていることが分かった。つまり、口内に食べ物があるときは発話を開始しにくいことが定量データから示された。また3.1節、3.2節、3.3節の結果においても、参加者間で、食事が発話に与える制限に差が見られなかった。食事は各参加者に平等に発話しにくい状態を与え、それによって参加者間の発話量を同じにさせる効果があると考えられる。

5. まとめ

本研究は食事場面における発話平準化現象が起きる仕組みを明らかにするために、食事時の参加者の行動を分析した。その結果、発話時と非発話時では食事行動が異なることが分かった。また参加者間で、食事に関わる行動に差は見られなかった。ここから、食事は自然に参加者間の行動を近づけさせ、食事行動に影響して発話量の偏りも少なくなり、発話平準化現象が起きたと考えられる。

文献

[1] 井上智雄, 大武美香, “多人数会話における食事の有無の影響—会話行動の平準化—”, ヒューマンインタフェース学会論文誌, Vol.13, No.3, pp.19-29, 2011.